

## ガバナー四方山話

### 第4回 出張の思い出

勤めていた事務所の部署の中では数少ない独身だったせいもあり、泊り掛け出張の必要な関与先の担当が増えて来て、4年住んだマンハッタンのホームステイ先から引っ越しをして、ニュージャージーの住宅街にあったコンドミニアムに居を定めたのは1982年の春頃でした。薄給の身で借金をして手に入れたコンドミニアムは高速道路にも近く1LDKながら70㎡くらいあり快適なところでした。

マンハッタンにある自分の事務所への通勤する日は少なく、郊外にあるクライアントの事務所へ直接行くのに大変便利でした。

NY事務所で勤めている間に担当した一番大きなクライアントは某大手電機メーカーで米国にいくつかの子会社があり、関連会社も含めるとアメリカ中に事業所があり、それらに出張するのが日常でした。

ボストン、シカゴ、ワシントンDCとダラスには定期的に出張し監査の仕事の他、給与計算や税務署への書類作成などしながら滞在していた日本人の駐在員の方々の相談相手も務めて居ました。しかし外国というところの恐ろしさというか、20代半ばの若造が、一流企業の中間管理職の方々相手に会計のことばかりではなく海外生活の講釈を垂れていたのですから、今となっては赤面の思い出です。

シカゴとダラスは流石に航空便を使わざるを得ませんでした。ボストンとワシントンDCは自宅から車で飛ばすと大体3時間半位でしたので独身の気楽さで良く車で行っていました。というのも、飛行機を使うと飛んでいる時間こそ1時間掛かりませんが、車で空港に行き駐車場に停め、ターミナルに移動して搭乗手続きをし、また到着後、レンタカー会社の所に行き車を借りてクライアントに向かうということをするの間違ひなく3時間以上掛かりました。

しかし、ニューヨーク・ボストン間にはシャトルと呼ばれる航空便があり、その当時は空港に着くと簡単な金属探知機をくぐり搭乗手続きもせずそのまま停まっている航空機に乗り空いている好きな席に座り、離陸後上空に上がってからクレジットカードで航空代金を払うという日本では考えられない手ごろな乗り物だったのを覚えています。当然機内サービスはゼロですが慣れた乗客は皆コーヒーなど持ち込んでいました。

出張先での喜びはやはり食べ物でした。ボストンでのメイン・ロブスターはあまり大きくない500g以内のものが一番おいしく、それをナッツクラッカーで割りながら二匹頂くのが至高の喜びでありました。またワシントンDCの郊外にあるシーフードレストランではズワイガニの食べ放題というのがあり、大ぶりの蟹を6杯頂いたのも懐かしい思い出です。季節が良いとソフトシェルクラブという脱皮したての柔らかな蟹を丸ごとから揚げにしたものを頂いたのも嬉しい記憶です。

マンハッタンから車で20分くらいのところにシティ・アイランドという島があり、夏はそこで、生のハマグリや大ぶりのあさりそれに牡蠣をカクテルソースで頂くのが素敵で、冷たいビールには最高でした。